（1972年6月3日第三種郵便物認可）　1982年7月10日　（毎月1回10日発行）

☆世界同時革命・世界革命戦争
世界プロレタリア独裁
共産主義勝利！
共産主義者同盟

第140号
（1982年）7月10日
編集発行人　南　安明
一部　100円
開封12回1500円24回3000円
密封　〃　1800円　〃　3600円

蜂起

蜂起社
発行所　蜂起社
本社　東京都渋谷区広尾5の16の16
TEL 03（446）0832
（振替）東京2－1512
関西支局
大阪 阿倍野 郵便局私書箱108号

7.18 ニカラグア革命三周年 ラテンアメリカ人民連帯集会
PM1時／全水道会館／L・A連帯実行委
7.24 刑法─「意見交換会」粉砕闘争
霞ヶ関／7.24実行委
7.31 監獄二法粉砕全国闘争
主催　監獄法改悪を許さない全国連絡会議
8.9 狭山上告棄却5ヶ年糾弾闘争

階級深部と共に闘う階級的労働運動の旗を掲げよ！

日本帝国主義と流動的下層労働者

―囚人労働・タコ部屋制度・強制連行―

階級的労働運動の創出が火急的かつ不可欠な任務となっている。だが、何が階級的労働運動であるのか、先ず、その階級的なる内容から鮮明にしなければならない。

我々は、階級深部と共に闘う階級的労働運動である、と断言する。我々は、階級深部と共に闘う階級的労働運動の五点の基準を『蜂起』一三八号一面論文で提起した。そして、現代過渡期世界の階級形成とは何か、という最も根幹にかかわる問題に解答を与えた。

現代過渡期世界の階級形成を闘いとる道は、階級深部の全戦列を打ち固めて労働運動の中に深く礎を構築する以外にはない。それ故に、階級深部と共に闘う階級的労働運動創出の出撃拠点を担うのは流動的下層労働者となる。なぜならば、流動的下層労働者こそ階級深部の怒りの坩堝（るつぼ）でありプロレタリア国際主義の坩堝だからである。

我々は『蜂起』一三四号で、戦後過渡期世界の現代帝国主義における流動的下層労働者の構造的位置を、「帝国主義段階における賃労働と資本の矛盾が集約され、独占資本の矛盾が集約される階級矛盾の根源である。戦後独占資本の剰余価値の搾取が蓄積った底辺であり戦後帝国主義の賃労働と資本の矛盾の集中的集約点である」と規定した。さらに、産業資本主義段階から帝国主義段階に達して過渡期世界に至る資本主義の世界史的発展過程を分析して、原理的かつ歴史的な基礎を与えた。

従って、本号の眼目は、以上を踏まえて、日本における流動的下層労働者の歴史的形成過程を日本資本主義の発達史に即して具体的に解明することになる。

日本資本主義の確立と流動的下層労働者

日本資本主義の階級的底辺に組み敷かれている流動的下層労働者は、明治維新以降の原蓄期に開始された集治監囚人労働と産業資本主義の確立期から独占資本主義への一挙的転化の時期を経て帝国主義の完成期に至る全期間を通して採用された拘禁タコ部屋労働とファシズム期に強行された朝鮮人・中国人の強制連行労働の系譜を引くものであり、拘禁と虐待と酷使に耐えて日本資本主義の基礎を築きながらも歴史から抹殺され、第二次大戦後の今日に至るも日本独占資本の賃労働と資本の矛盾の集約点として日本帝国主義の階級支配の犠牲を集中的に背負わされているのである。

「明治維新は、世界史的な産業資本主義段階が頂点に達して帝国主義段階を準備する移行期、しかも、資本主義世界市場が完成される最終局面という客観的な世界史的段階で行わなければならない変革であったので、諸列強の植民地・半植民地となって国家としての独立を喪失するか、資本制生産関係を創出し国民国家を形成して生存し抜くか、という二者択一の道しか残されない厳しい歴史的宿命を背負っていた」即ち「日本資本主義は、資本の世界史的進歩の時代に登場できず、資本の世界史的帝国主義化の時代に登場したが故に、その権力である天皇制も開明性などはツメの垢ほども持ちあわせがなかった」。（さらぎ徳二『天皇論』三三－四頁）

「日本資本主義は、客観的には世界資本主義が帝国主義段階へ突入する世界史的段階、主体的には諸列強の市場分割戦に対抗するための明治政府による上からの殖産的な産業革命、という客観的主体的な特殊性に規定され、その再生産構造を確立した資本主義である。」（さらぎ徳二『宇野経済学体系の批判』二二二頁）

要するに、日本資本主義は、世界資本主義の帝国主義への世界史的な移行期に登場して、諸列強との市場分割戦を宿命づけられていたが故に、一片の開明性も身にまとう余裕もなく、資本の原蓄がもつ本来の暴力的性格をはるかに越えた凶暴性を、その原蓄と産業革命に刻印し、集治監囚人労働と拘禁タコ部屋労働と朝鮮人・中国人の強制連行労働を生み出し、強行し続けたということである。

それでは、日本資本主義は、その如何なる発展段階で、流動的下層労働者の原基ともいうべき集治監囚人労働と朝鮮人・中国人の強制連行労働と拘禁タコ部屋労働を生み出していったのであろうか。

我々は、一八六八年の明治維新以降の日本資本主義の発展段階を次のように区分している。

①一八七三（明治六）年の地租改正から一八八九（明治二二）年の欽定憲法発布に至る原蓄期

②一八九〇（明治二三）年の国会開設から一九〇一（明治三四）年の八幡製鉄所の稼動に至る産業資本確立期

③一九〇一（明治三四）年から一九〇五（明治三八）年の日露戦争終結に至る産業資本から独占資本への一挙的転化の時期

④一九〇六（明治三九）年から一九一〇（明治四三）年の「日韓併合」を経て一九一三（大正二）年に至る帝国主義確立期

⑤一九一四（大正三）年から一九一八年（大正七）年に至る第一次世界大戦と帝国主義の完成期

⑥一九一八（大正七）年から一九三二（昭和七）年に至る過渡期世界の開幕と二〇年代の予防反革命（ファシズムの胎動）期

⑦一九三二（昭和七）年の五・一五事件から一九三六（昭和一一）年の二・二六事件に至るファシズムの勝利の時期

⑧一九三七（昭和一二）年の第一次近衛内閣の擁立と中国侵略戦争の開始から一九三八（昭和一三）年の国家総動員法の公布と一九三九（昭和一四）年の国民徴用令の公布を経て一九四〇（昭和一五）年の第二次近衛内閣による大政翼賛会と大日本産業報国会の発足に至るファシズム政体の完成期

⑨一九四一（昭和一六）年東条内閣の成立と太平洋戦争を経て一九四五（昭和二〇）年の敗戦に至るファシズム破滅期

――以上の九区分である。

日本資本主義は、このような発展過程の中で、原蓄期に集治監囚人労働を採用して強行し、産業資本の確立後に拘禁タコ部屋労働を採用してファシズムの破滅の日までこれを強行し、植民地にまでこれを行使したばかりか、朝鮮人・中国人を強制連行してタコ部屋労働を強制し続けたのである。

集治監囚人労働は日本型原蓄の産物

日本資本主義は、原蓄と産業革命の時期に、炭坑・鉱山・鉄道敷設・道路工事・建築現場へ、集治監の囚人を、外役労働として投入し、死に至るまで酷使した。

「江戸時代には、佐賀藩が幕末に隠れキリシタンの囚人を高島炭鉱に投入した事実はあるが、それはむしろ例外的であって…明治維新以降、新政府が官営鉱山に囚人を大々的に投入したことが歴史的原因で」（小学館『日本の歴史』二九巻一一一頁）あった。

山谷
日雇全協
釜ヶ崎解放
釜ヶ崎日雇労働組合
日雇全協結成大会
全国寄せ場

真紅の旗（写真左より寿・山谷・笹島・釜ヶ崎）掲げ四大寄せ場の統合＝創立大会かちとる（6月27日／葛飾区民会館）

一八八八（明治二一）年、三井資本は、一八七三（明治六）年以降、大量の囚人労働を行使してきた官営三池炭鉱の払い下げを申請して即座に認可を得、三池集治監をはじめ福岡熊本両県の重刑囚を投入した。従って、三池炭坑では一八八九－九八年の間、採炭夫の六〇－七〇％を集治監囚人労働が占めていた。

三井財閥の三本柱である三井銀行・三井物産・三井鉱山の生産的基礎は、囚人労働の酷使と搾取によって確立したのである。

右の如く、集治監囚人労働は、決して封建遺制の産物ではなく、まさに、資本の産物、就中、日本型原蓄の産物だったのである。

集治監囚人労働は、北海道で全面化した。

「明治政府は…北海道を開拓するのに『士族・屯田兵・囚人』という三つの拘禁労働者を送り込んだ」（小池喜孝『常紋トンネル』一九頁、以下『常紋』と略）

要するに、薩・長・土・肥の軽率志士団が権力を握る明治天皇制権力は、維新で反革命に廻って敗北し解体された東国各藩の失業士族と囚人を強制的に渡道させ、北海道に「内国植民地」を建設しようとしたのである。

地租改正令の出た翌年の一八七四（明治七）年から一八九九（明治三二）年までに、屯田兵とその家族四万人が渡道した。

一八八一年に樺戸集治監、八二年に空知集治監、八五年に釧路集治監、九一年に網走集治監が、次々に設置され、囚人が送られて来た。一九〇一年には三池集治監の囚人も北海道に移送された。

国家権力による「炭鉱への囚人の投入は、北海道の官営幌内鉱山でも強行された。明治十五年七月に空知集治監が設置され…同年一〇月内務省は…炭坑での囚人使役に正式許可をあたえた。こうして翌十六年一一月に約二五〇人の囚人が石炭採掘にかり出され、以後、幌内炭鉱はつぎつぎと囚人を坑内にくりこんだ。その結果、明治一九年をさかいとして囚人は良民坑夫の数を追いこし、明治二〇年代初頭には、文字どうり囚人労働が基軸となっている。」（『日本の歴史』五五頁）

年次	一般	囚人
一八八五	六三％	三七％
一八八六	四五％	五五％
一八八七	二六％	七四％
一八八八	二二％	七八％

一八八五（明治一八）年、太政官書記官金子堅太郎は、「重罪犯人多くして…国庫支出の監獄費を増加するの際なれば、囚徒をして…工事に服せしめ、もしこれに堪えず斃れ死して、その人員を減少するは…止むを得ざる政略なり」という復命書を提出した。

かくして翌年、北海道庁が開設され、集治監囚人労働が全面的に強行されたのである。

一八八六年には、釧路集治監の囚人労働が、アトサヌプリ硫黄山の採掘と精錬に投入された。安田善次郎は、ここに釧路鉄道をしき釧路港から硫黄を輸出して、安田財閥の基礎を築いた。

「一八八九（明治二二）年に設立された北海道炭礦鉄道会社（以下『北炭』と呼ぶ）は直ちに石炭輸送用の室蘭線（岩見沢・室蘭間一八九〇年着工、九二年開通）と夕張線（夕張・追分間、追分で室蘭線に接続。工事期間は室蘭線と同じ）の敷設工事にとりかかった。当時、囚人を酷使した幌内炭礦の生産高は九州の三池に迫る勢いを示し…夕張炭礦は夕張線の開通によって、幌内を凌ぐ北炭のドル箱になっていた」（『常紋』五一頁）

一八九一（明治二四）年、網走集治監の囚人一二〇〇人が投入され、網走から北見峠までの全長一六五キロが一年間で完成された。この網走道路は別名「囚人道路」とも呼ばれている。

この原蓄期に階級的底辺に組み敷かれ、国家権力に渡道させられ地の底から地の果てへと流動を強制され、酷使かつ搾取され続けた北海道の囚人労働こそ、流動的下層労働の歴史的原基であった。

産業資本主義の確立とタコ部屋労働の誕生

集治監囚人労働は、納屋制度・飯場制度・タコ部屋制度を生み出していった。

日本資本主義が原蓄と産業革命の時期から産業資本主義の成立過程に移行する段階で、集治監囚人労働は、九州の炭坑においては納屋制度へ、北海道の炭坑においては飯場制度へ、そして鉄道敷設工事・道路工事・港湾建設工事においてはタコ部屋制度へ移行していったのである。

高島炭鉱は、一八八一（明治一四）年、三菱の所有となり、三菱財閥のドル箱となった。三菱資本は、石炭生産の拡大のために、集治監囚人労働力の限界を、納屋制度をもって解決せんとした。

納屋制度とは、炭坑夫たちを納屋（小屋）の中に監禁して生活させ、納屋頭が坑内労働は勿論のこと日常生活まで支配する、暴力的拘禁労働支配制度であった。

「三池炭鉱は採炭部門の基幹的労働力は囚人労働にたよっていたため、納屋制度はむしろ補完的位置にあった。それでも一般坑夫を雇い入れる必要はあったので、明治二二年四月…八人を坑夫募集受負人に任命した。…同年七月には一般坑夫数が増加し、これを収容する…納屋を建設した。」（前掲『日本の歴史』一三二頁）

筑豊炭田は、高島・三池の海底炭層採掘とは異なり、遠賀川と支流にそう低地炭層の採掘が可能であったため、財閥系大資本と地元小資本が大小入り乱れ、日本最大の炭鉱地帯となった。

そして、高島と三池の納屋制度は、筑豊にも移植された。筑豊では、大正末期でさえ平均六二％の炭鉱が納屋制度をとっていた。

筑豊炭坑の納屋制度に拘禁された労働者の多くは、部落零細農業から流出した部落大衆であった。

「日清・日露両戦争の勃発は部落産業に大きな影響をあたえた。…重化学工業と石炭産業を軸として国内産業が活況を呈するにつれ必然的に労働力の需要を拡大したが、同時に進行していた農民層分解の一方の極にあった部落民をして、鉱工業労働者への転職・流出をうながすにいたった」

「とくに福岡地方は石炭業の飛躍的発展から、零細な部落農業にみきりをつけた人びとが、貧困からの脱出をもとめて、同期から一九二五年（大正十四）ころにかけて、筑豊地方の産炭地域へ移住しはじめる。農業化のための『散田・荒所』への入植期を部落の第一次大移動期と仮定するなら、産業地域への移住期は、第二次大移動期と呼んでよかろう。」

「宗像郡池浦村の部落は、戸数一五戸の小部落であったが、一九〇〇年（明治三十三）ころから一村をあげ、つぎつぎに産炭地へ移住している。」

「移住者が別れにのぞんで言いかわしたことばは、『一人になるな、一人になっちゃいけんぞ』ということであった。たがいに『差別』と『迫害』から身を守る方法をたしかめあいながら別れていったという。」

「産炭地へ移住した人びとは、ここでも低賃金と低作業への就労を強いられ、脱賤化・脱貧困がならないままに、ふたたび、資本主義労働体系のなかに組み込まれ、筑豊の各地に近代的被差別部落を形成・拡大していった。現今の筑豊地方の産炭地域における各市町村の部落人口が非部落人口の三〇－五〇％におよぶ事例に徴しても仕事の移動のはげしさがどれほどであったか想像できよう」（『歴史公論』三六巻九一頁）

部落大衆は、時に荒地への入植を強制され、時に炭坑の納屋制度に拘禁され、時に炭住から排除されながら、底辺を流動し筑豊の地に部落を形成したのである。

空知集治監の囚人労働で始められた官営幌内炭鉱を一八八九（明治二二）年に払下げられて成立した北炭は飯場制度を採用した。

隅谷三喜男の『日本石炭産業分析』によると、北海道の飯場制度は基本的には九州の納屋制度と同じであるが、北海道では九州のように農村出身の村方坑夫を募集できないため、東北農村の単身出稼ぎ坑夫を飯場に拘禁して酷使し搾取する労働支配制度で、鉄道・道路・港湾などの工事現場にみられる監獄部屋すなわちタコ部屋に対応するものであった。

要するに、集治監囚人労働を支配した国家権力の手先である看守に代って、飯場頭＝請負人が資本の手先として暴力で坑夫の身柄を拘禁し酷使し搾取したのである。

「富山・石川・秋田・山形・新潟の各県からやってきた坑夫たちはつぎのような契約書をさしだしている。かってに離めない。毎月三〇銭ずつ積立貯金をする（逃亡防止）、病気その他の事故で…首を切られても旅費の請求はもちろん苦情…はいっさいいわない、という内容である。」『日本の歴史』一四七頁）

それでは、タコ部屋労働は、何日何処で誕生したのであろうか。

「一八九〇年代の夕張線工事で石狩原野を直通して炭鉱と室蘭港を結ぶ室蘭線と夕張線の大工事の中でタコ部屋労働は生まれた。」

「一八九〇年代の夕張線工事で誕生したタコ部屋制度は、以後、北海道鉄道工事にうけつがれ、一九一〇年代には確立する」そして「タコ部屋制度は「一八九〇年代に始まり、一九四〇年代終わりまで約六〇年間つづいた」（『常紋』五二頁＆一一二頁）

「囚人に代わって北海道の拘禁労働者の主力になったのが、タコである。囚人の鎖に代わって、暴力がタコをしばった。誘拐または脅迫されて連れこまれた内地のタコ（他雇とも書く）と、わずかな前借金をもらった道内のタコ（地雇ともいう）は、逃亡できぬようにつくられた飯場に収容され、棒頭と呼ばれた幹部に監視された。この飯場は『タコ部屋』または『監獄部屋』と呼ばれ、囚人労働の悪しき伝統をうけついだ。」（同二〇頁）「何十何百人の働き盛りの男たちを一室に監禁し、十四時間ないし十六時間こき使うためには、あらたな暴力支配による階級秩序が重じられた。この秩序をおかす者には、死の制裁が加えられた。」（同一一四頁）

多くのタコ労働者が酷寒の工事中に殉難した。彼等の遺体は橋の下や線路の下に埋められた。彼等の墓はどこにもなかった。脱走した者も、棒頭と警察に捕まってリンチを受けるか、飢えと寒さで雪の原野に屍をさらす結果となった。

独占資本主義の発展とタコ部屋制度の拡大

日露戦争後、即ち一九〇六年以降の独占資本の発展過程で大企業は北海道と樺太に進出、タコ労働によって、石炭・鉱石・木材・パルプなどの資源を運搬する鉄道と道路の大工事を行ったのである。

「北海道の鉄道敷設が、大企業による資源開発に重点をおきかえたのは、日露戦争後の日本資本主義の発展に対応するもので…一九〇六（明治三九）年には、戦後の財政困難な時期にもかかわらず、『鉄道国有化法案』を可決し、公債を発行して鉄道を国有化し、『国力の発展』（軍事輸送の強化）と『国富の充実』（北海道では大企業による資源の開発）をはかった。」（同五五頁）

「大企業による山林所有はめざましく、北炭・三井・三菱など炭鉱会社は坑木原料を、王子製紙はパルプ材を、伊藤組・新宮商行・住友林業は木材を求めて、オホーツク地方の山林大地主になった」

「第一次世界大戦は、北見地方にハッカ・豆・木材ブームをもたらし…鉄道が開通した一九一一（明治四四）年に一万一〇〇〇人だった北見の人口は、七年後の一九一八（大正七）年には二万四〇〇〇人をこえ」（同六一頁）た。

「日露戦争後の北海道には、王子製紙・富士製紙（のち王子が合併）や日本製鋼などの大企業が進出した。タコは大資本の工場に原料・燃料を運ぶ鉄道路線をつくっただけでなく、工場建設にも使われた。」（同八七頁）

「王子製紙は…国有未開地の払い下げをうけ、また私有地を買収した。一九一〇（明治四三）年には五〇〇町歩だった所有林は、一九一八（大正七）年には二万六〇〇〇町歩に達し、一九二六（大正一五）年には、わが国新聞用紙の七五％を生産するに至った。…王子製紙は、朱鞠内（シュマリナイ）＝雨竜（ウリュウ）湖の水力発電と深名（シンメイ）線による森林開発でその生産力を発展させた。朱鞠内湖に水力発電所を建設した多くの労働者の中に、強制連行・労働の朝鮮人が含まれている。」（同八八頁）

「日露戦争後、北炭も製鉄所建設を企画した。一九〇七（明治四〇）年には、海軍と北炭と英国アームストロング社と提携して室蘭製鉄所を建設した。日本製鋼がこれである。…この日本製鋼の建設工事では、百人余りのタコが死んだという。」（前同）

北海道における独占資本の発展と共に最盛期を迎えたタコ部屋制度は、警察と固く結び帝国主義の労働支配の武器となった。

「厚岸の巡査は一九一五（大正四）年から三年間、毎年荒井組長から請願で派出された。この請願巡査制度は、一八八八（明治二一）年に告示されたもので、巡査の費用はすべて請願者が前納し、請願者の利益保護のために設けられた制度であった。いわば組が巡査を雇ったのである。…タコ部屋の一番上の親方から給料をもらう巡査に、タコ部屋を取り締ることができるはずはなかった。」（同六四頁）

右の如く、タコ部屋制度は原蓄期の資本の要請で生まれた集治監囚人労働の系譜を引くものであるが故に、産業資本の確立期に誕生し独占資本の発展と共に最盛期を迎え、日帝の侵略とファシズムの労働支配に転化し得たのである。

日本帝国主義の侵略と流動的下層労働者

日本資本主義が産業資本から独占資本への一挙的転化をとげて帝国主義を完成させる段階では、タコ部屋に押し込められる流動的下層労働者の構成も大きな変化をとげた。

第一は、国内の流動的下層労働者の社会的な供給基盤が、出稼農民型から都市失業者型へと大きく移動した点である。

第二は、日帝がタコ部屋制度を植民地経営の武器としたため、後進国人民の流動的下層労働者が形成された点である。

第三は、日帝ファシズムが朝鮮人を大量に強制連行して流動的下層労働者にした点である。

以下、順を追って考察しよう。

日本帝国主義が完成すると「長らくタコ供出の一位を占めていた東北地方は、一九三四（昭和九）年に関東に抜かれ、三七（昭和一二）年には中部にも抜かれ、三八（昭和一三）年には近畿が東北と肩を並べるに至った。」

「この傾向は、タコの供給地が東北農村から関東以西の農村に西漸したのではなく、農村から都市へ移ったことを示すものである。すなわち第一次大戦後の戦後恐慌から昭和恐慌につづく慢性恐慌で農民は没落して都市に集中した。大量の失業者と没落農民を抱えた都市は、そのスラム街・細民街をひろげ、行商人や沖仲仕や雑役夫などの底辺労働者をふやした。その底辺労働者の一つがタコで、タコ部屋は都市に集中した没落農民や失業者層を吸引した。…タコを募集した周旋屋の存在地が、農村である東北から関東以西の都市に移った」（同一六五頁）

この時期は、日本の四大寄せ場が形成される時期であった。すなわち、日本帝国主義の階級的底辺をなす被搾取勤労大衆、部落大衆、沖縄人民、在日朝鮮人民が都市の寄せ場に住居と仕事を求めて集まり、流動的下層労働者の大群を形成し、階級深部の怒りを蓄積してゆく時代でもあった。

流　哲也は、『寄せ場形成史』という論文でこう述べている。

大阪の「西成区には、日本最大の寄せ場〈釜ヶ崎〉がある。それが今日の如く形成されたのは、一九三〇年の第五回内国勧業博覧会の第一会場となった現在の天王寺公園、新世界（当時は原野同様の荒地）へいたる日本橋からの“御幸道路”整理の目的で、当時スラム化していた長町四丁目の一部と俗称、新台湾と呼ばれていた細民街を、美観を損なうという理由で取り払い、刑場と墓地の跡地（今日の釜ヶ崎）へと移したことから始まる。

即ち、旧市から追われ、新市方面へ向かった日本人下層と同じ方面に住みつくしかなかった朝鮮人をはじめとする被植民地人民との合流によって形成されたのが、近代－現代の下層社会にほかならない。日本人下層社会と渡日した被植民地人民の居住地域の関係は、山谷と三河島周辺のような例として、日本の代表的な都市において必ず存在する。寄せ場－下層社会は、そうした関係の中にある。」

一九一〇年の「日韓併合」で「朝鮮人は従来の『日本国内での住居制限及び業務禁止の勅令』（一八九九年）は適用されなくなり、法的には日本への移住は自由となった。」

しかし「一九一九年四月、朝鮮総督府は三・一運動の波及拡大を阻止する目的もあって警務総監令第３号『朝鮮人旅行取締に関する件』を発布した。」

「日本国内においては、一九二三年以来…失業が激増。渡日した朝鮮人は、日本社会内部からもその経済体制からも排斥され、密集した貧民部落を形成した。」

だが「朝鮮農村の飢餓現象は絶頂を極め、流浪民は生活の糧を求めて…日本当局の抑圧にも拘らず日本へ継続して流入した。一九三一年、三一万人であった在日朝鮮人は、一九三八年には八〇万人と二倍以上に増加した。」

一九二三年六月二〇日と二一日の『大阪朝日新聞』は当時の渡日朝鮮人の状態をこう述べている。

「昨年末までに大阪府下へ流れこんだ鮮人は一万人をちょっと出ていたが、本年六月末の調べによれば一万二千名に達している。済州島からの移住が一等多く、五〇〇人の行商人を除いた他の全部は労働者だ。職業の色別を統計すると土方の三、〇〇〇名が筆頭で鉄工一、〇〇〇、紡績工八〇〇、電気工五〇〇、造船セメント工三〇〇名が固定職業の中では優勢だ」「煎じつめたところ六、五〇〇名という数字が現在の就職者だ。この家族が約二、五〇〇名。これに行商人三〇〇名、雑役五〇〇名、人夫部屋を筆頭にした商人七〇〇、無職、官公吏、雇員などの六四〇名を合した二、〇四〇名を通算すれば一〇、七九〇名となる。大阪在住の全鮮人一二、〇〇〇名からこの数字を引き去った残り一、二一〇名が即ち一定の職業なきものだ。勿論この中には鮮飴やそれに似たものも含まれてはいるが、八〇〇名位は失業者とみて至当だろう。」

渡日した朝鮮人労働者は、日帝の樺太植民地経営のためタコ部屋につれ去られ、アイヌ労働者と共に酷使かつ搾取された。

「樺太の開発は、タコにはじまってタコに終ったといえるほどタコ部屋が盛んで、その『盛況』ぶりは、北海道以上であった。樺太では鉄道・道路・港湾・工場の建設が、一九〇六（明治三九）年の日本領有後いっせいにはじまり、建設業者は樺太を天国といった」

「日本の植民地になった一九〇六年の人口が一万二〇〇〇余人だった樺太は、太平洋戦争がはじまった年の一九四一（昭和一六）年には四〇万人になっていた。この人口は、大企業による水産・森林・鉱物資源の乱獲といえるほどの開発につかわれた。樺太経営は資源乱獲の四十年であっただけでなく、中国人・朝鮮人・アイヌ人を含む鉱夫・杣夫・漁夫・タコ労働の磨滅の四十年だった。…大泊・豊原間の鉄道（一九一〇年開通）や王子製紙大泊工場（一九一四年操業）にはじまる鉄道・工場の建設は、北海道・内地から連れてきたタコによって行われ、タコ部屋は樺太植民地経営の根幹におかれた。」（『常紋』九〇頁）

タコ労働者は「ジャコシカ」と呼ばれた。樺太のジャコウジカが跳ねて飛び歩くところが島内を転々として歩く底辺労働者に似ているので、流動的下層労働者をこう呼んだのである。

堅田精司『旧樺太内国貿易史』によると次の如くである。

「鉄道・道路・工場・飛行場はタコを使って建設し石炭をタコと朝鮮人に採掘させて、大資本は成長した。王子製紙は一九三九（昭和一四）年には、樺太の全工業労働者の三割を擁し…水産業以外の全産業をその支配下に収めた」

「炭鉱労働にたずさわったのは主として朝鮮人労働者で、日本政府の手で強制連行され、大資本の下で働かされた。第二次大戦後も帰国の希望がかなえられずに残留している朝鮮人が、まだいる。樺太植民地四十年の大資本成長の歴史は、タコや朝鮮人など『ジャコシカ』の苦汁労働の歴史でもあった。タコや朝鮮人の苦汁労働をぬきにして、北海道・樺太における大資本の急速な成長はなかったのである。」（『常紋』九六頁）

日帝のタコ部屋植民地支配は、樺太にとどまらず、朝鮮と中国東北部（満州）に拡大された。本多勝一『中国の日本軍』は「タコ部屋的生活が、全東北地方の中国人にとっては、日常だった」と書いている。

ファシズムの確立と朝鮮人強制連行労働

日本帝国主義は、日露戦争によって一九〇六年にロシアからサハリンを獲得し、一九一〇年の「日韓併合」で朝鮮をも領土におさめて、多数の朝鮮人労働者を北海道と樺太のタコ部屋に次々と送り込んできた。

桑原真人（北海道開拓記念館職員）は次の数字をあげている。

「北海道で朝鮮人労働者の大量採用が開始されたのは大正五年（一九一六）のことで…雇用主は北海道炭礦汽船株式会社（北炭）であった。…この年の三五人を契機に、以後六年－三七〇人、八年－七五四人、十年－五七七人、十二年－八一九人、十四年－一〇〇五人と北炭は朝鮮人労働者をしだいに増加させてゆく。大正十年（一九二一）を例にとると、この年の在道朝鮮人は、一六二二人であるから、北炭はその三五・六％を雇用していた」（「北海道開拓と朝鮮人労働者」『歴史公論』五七号一二〇頁）

この様に朝鮮人労働者は大量に北海道と樺太のタコ部屋に送り込まれていたが、言葉の厳密な意味では、まだ、「強制連行労働」とはいえないだろう。

では、「強制連行」とは如何なる状態で行われたのであろうか。

朴慶植はこう言っている。

「強制連行というのは一九三八年四月、日本政府が中国への侵略戦争拡大にともなって『国家総動員法』をつくり、その具体策として翌年七月国民徴用令を公布し、一九四五年八月までに約一五〇万人の朝鮮人、約四万人の中国人を強制的に日本内に連行して、炭鉱・金属鉱山・軍需工場・軍事施設工事などで強制労働に使役したことをいう。」（『歴史公論』五七号九二頁）

勿論「一八三八年までの朝鮮人の日本への渡航も自由な移住としてではなく、日本の植民地被圧迫民族として一切の政治的権利の剥奪、経済的収奪、社会的に民族的差別をうけてきた状況下での渡航であった。」だが「一九三九年からの渡航は戦時労働力として国家権力の発動である国民徴用令の適用による、まさに文字どおりの強制的な連行であった。」（前同）

日帝の会社労務・警察官・官公吏らが一体となった詐欺的かつ暴力的な労働動員であった。

我々の史的区分に基づけば、まさに、ファシズムが政治権力を掌握した後にファシズム政体を完成させる時期における植民地および占領地人民の国家的暴力による強制的労働力動員であった、と規定することが出来る。

「こうして一九三九年七月～一九四五年八月に日本内の石炭山に約六〇万人、軍需工場に約四〇万人、土建工事関係に約三〇万人、金属鉱山に約一五万人、港湾荷役関係に約五万人、合計約一五〇万人が、またこの外に、中国、南方の戦線に軍人・軍属として約三七

（二面へ続く）

6・27

国際主義と階級的労働運動の旗掲げ

日雇全協創立さる

日帝のファシズム労働支配にむけた労働戦線の右翼的統一が、全民労協（全日本民間労働組合協議会）として、いよいよその排外主義をあらわにし、基幹労働者総体がこの渦に巻き込まれんとしている。

ファシズム労働運動解体・階級的労働運動創出が火急の任務としてある今、五五年体制下で労働運動の枠外においやられ帝国主義支配の下層への加重を一身に受けてきた流動的下層労働者は、反帝国際主義の旗を鮮明にして日雇全協（全国日雇労働組合協議会）創立を勝ち取った。

六月二七日、葛飾区民会館に結集した釜ヶ崎・笹島・寿・山谷の流動的下層労働者をはじめとした一八〇名の仲間は、「船本洲治決起七周年・釜共－現闘結成一〇周年・全国日雇労働組合協議会創立大会」を、五月二八日、一、三〇〇名を結集し釜ヶ崎で闘い取られた結成宣言集会（前号既報）に引き続いて闘い取ったのだ。

集会は歓声の中で集会開始宣言を発し、続いて四寄せ場からの圧倒的結集で集会成立を確認した。

まず仲間より、七年前の六月二五日沖縄に於て自決した闘いの先達・船本洲治同志の闘いの紹介と、黙とうが提起され全員が船本の檄－仲間たちよ！黙って野垂れ死ぬな！未来は無産大衆のものであり、最後の勝利は闘う労働者のものである。確信をもって前進せよ！－を心に想い船本の意志を受け継いでゆく決意を新たにした。

第一号議案＜交流会経過報告＞第二号議案＜運動方針＞と活発な討論をへて全協確認した後、三里塚反対同盟・北原鉱治氏よりの日雇全協結成への祝辞と、七・四現地闘争への結集要請を圧倒的な拍手で確認し決意を固めていった。

続いて、『労働情報』樋口篤三氏より日雇全協結成の歴史的意義と、労戦の右翼的統一との対決が熱っぽくアピールされた。

獄中より、六・九マンモスポリセン滅・福江洋一氏の檄電が読みあげられていった。

第三号議案＜組織運営の原則＞承認、第四号＜評議委員＞を四寄せ場より選出し、議長より代表して決意表明が行われた。

そして第五号＜宣言＞が、力強く読みあげられていった。

日雇全協全国闘争として、ケタオチ暴力飯場・赤石組闘争が、山谷争議団の仲間から提起された。（翌二八日、暁の電撃作戦をもって逃亡するオヤジを捕捉し全面勝利し、実践をもって日雇全協結成の地平をうち固めた。）

イスラエル・シオニストによるパレスチナ人民攻撃への緊急抗議声明を確認した後、第二部へと入っていった。

まず赤堀中央闘争委よりのアピール、続いて部落解放同盟狭山中央闘争委よりのメッセージを受け、更に沖縄の仲間からのテープメッセージの後、在日朝鮮人獄中者救援センターの仲間から獄中者問題、入管体制下の在日朝鮮人民との連帯共同闘争についての提起を受けていった。その他、多くのメッセージ・アピールの後、戦前在日朝鮮人民との共同闘争を全協関東自由労組の下で闘った大先輩からの講演をうけ決意表明をもって集会を終えていった。

日雇全協創立の歴史的意義は、四大寄せ場の統合を総括し、階級深部の怒りで武装し、寄せ場を階級的労働運動の出撃拠点として打ち固め、反帝・国際主義を鮮明にし、文字通り「病者」・「障害者」・被差別部落民・在日朝鮮人民・沖縄人民との階級深部の怒りの連帯で日帝打倒をめざす階級的労働運動の創出を、資本家との同盟を声高に恥しらずに叫ぶプロ帝＝山統労の妨害をはねのけ路線的分岐の下、闘い取ったことだ。

全国の日雇・下層労働者団結せよ！日雇全協の旗の下、自国帝国主義打倒へ総進撃せよ！

夏期一時金カンパを訴える

全国の革命的同志、友人諸君！共産主義者同盟蜂起派より、夏期一時金カンパを圧倒的に集中されんことを再び訴える。

現在まさに、三ブロック階級闘争は、全世界で燃え上がっている。

南朝鮮、エルサルバドル、グァテマラを先頭とした後進国人民の民族解放－革命戦争の嵐、ポーランドをはじめとした「労働者国家」内階級闘争の開始、そして、帝国主義本国に於る反戦反核闘争の高揚を見よ！最後的危機にあえぐ帝国主義諸列強は、かかる三ブロック階級闘争の激発に身構え、侵略反革命の更なる強化をもって、全世界人民におそいかかってきている。

日帝は、今秋刑法改「正」国会上程を突破口に、刑法・天皇・自衛隊を三位一体とし、改憲へと突き進む天皇主義ファシズムの攻撃を全面化させているのだ。

かかるファシズム攻撃こそ、過渡期世界の尖鋭な予防反革命であり、革命党－革命勢力を根こそぎ圧殺することを政治目的とするものである。かかる＜ファシズムか革命か＞の攻撃の真只中で、我々の任務は鮮明である。

全ての同志友人諸君！今こそ、ファシズム粉砕・日帝打倒・社会主義革命の階級決戦へと攻め登ろう。その勝利の一切の鍵は、建党建軍＝非合法体制の勝利にある。我が同盟は破防法と爆取攻撃の洗礼を受けつつも、非合法体制を断乎堅持し抜いてきている。

階級深部の中から武装し、建党・建軍＝非合法体制を強化し、党・軍・統一戦線の勝利の陣形を打ち鍛えよ！

同志・友人諸君！夏期一時金三割以上カンパを圧倒的に集中されることを訴える。

共産主義者同盟蜂起派

国際主義と階級深部の怒りで 6・15国際連帯集会かちとる

六・一五国際連帯集会は、東西において、プロレタリア国際主義を実践する内実をー①反帝国際連帯、②自国帝国主義打倒・安保粉砕、③階級深部の怒りの中から武装しファシズムと対決し一切の排外主義を粉砕するー闘いとして明らかにしてかちとられた。

六・一五集会によって、我々はかつてない高まりを見せている反戦反核運動を、国連軍縮請願運動や護憲へと収約・歪曲せんとする社共人民戦線派や、これに合流・追随して侵略反革命との対決を不問にし戦後「平和と民主主義」を擁護する市民主義グループ等の小ブル反戦・平和主義、祖国擁護の排外主義を打ち破り、ファシズムに解体される思想的・戦略的混迷＝脱イデオロギー・脱政治の現実が進行する主体の危機を突破して反核闘争を核武装する安保粉砕を闘う反帝闘争＝自国帝国主義打倒の闘いとして牽引していく階級的展望を切り拓いたのである。

国際主義を実践する内実を鮮明にせよ！

今や、八〇年代階級闘争は、≪ファシズムと戦争≫への道か、≪自国帝国主義を打倒する革命≫の道か、という歴史的な大きな岐路を迎えている。

そして、こうしたファシズムとの階級決戦が不可避に突きつけられている現実＝階級攻防のルツボの中で、全ての人民は、いかに生きかつ闘うべきかを、階級的立場の問題として、とりわけ革命的実践＝自国帝国主義打倒を闘う試金石であるプロレタリア国際主義の実践・内実を、決定的に問われているのである。

我々に課せられている国際主義の思想・実践とは——

第一に、帝国主義の新植民地支配体制を崩壊的危機にたたき込んでいる南朝鮮ーラテンアメリカーパレスチナ人民をはじめ、いかなる暴虐と圧制にも屈することなく幾多の流血と犠牲をも恐れず全人類の解放へ向けて闘い続けている全世界の労働者人民との国際主義を鮮明にした固い連帯＝反帝国際連帯が、今ほど問われている時はないのである。

我々は、帝国主義の新植民地支配の重圧＝苛酷な弾圧と圧制の壁を破って不屈に闘う後進国人民の民族的苦悩・階級的怒りに応え真の国際連帯を築くために、帝国主義の侵略反革命ー新植民地支配を粉砕する自国帝国主義打倒の巨大な火柱を燃えあがらせていかねばならない。

第二に、国際主義の任務を、自国帝国主義打倒として実践的に貫徹するためには、歴史的岐路を迎えている八〇年代日本階級闘争の質的転換と革命主体の飛躍をかちとるべく闘い抜かねばならない。

すなわち、七〇年安保決戦敗北以降強いられてきた「封じ込められた軍事の壁」を突破し、≪ファシズムとの階級決戦に勝利する権力闘争＝武装闘争≫の新たな地平を切り拓いていくことが、全ての革命的左翼・プロレタリアート人民に課せられた歴史的・実践的課題なのである。

我々は、国際主義の実践を、安易な「反戦・平和」の表明や民主主義の理念にすりかえたり、自国帝国主義打倒の闘いを、戦後政治支配体制＝議会制民主主義の擁護ー「生活と権利の防衛」におきかえることをきっぱり拒否し、一切の祖国擁護主義を粉砕しなければならない。

第三は、日帝の侵略反革命総路線＝≪ファシズムと戦争≫への道＝総力戦争体制確立の攻撃を打ち砕く≪ファシズムを粉砕し日帝を打倒する≫闘いを、階級深部の怒りの中から武装し構築していくことである

帝国主義を打倒し一切の搾取と支配そのものを根底からくつがえす革命的な闘いは、部落民・「障害者」・下層労働者・在日朝鮮人民・沖縄人民など階級支配の底辺からの怒り・闘いとの結合なくして創出することはできないのである。

階級深部の怒りの中から武装するプロ独派の戦列を打ち固め、ファシズム・人民戦線派と対決し、一切の排外主義を粉砕して進撃しよう！

日・沖・朝・LA人民の連帯を掲げた国際連帯集会（6月15日／東京）

過渡期世界の生きた現実の階級攻防は、吹きすさぶ暴虐の嵐と一切の逆流に抗し、民族・人種・国家を超克した帝国主義打倒の世界革命戦争ー資本の鉄鎖を打ち砕き全世界を獲得する闘いを、プロレタリアートの世界史的使命として要請している。この全人類の解放へ向けた闘いの頭上に我々はプロレタリア国際主義の真紅の旗を掲げて進まねばならない。

日帝打倒・安保粉砕を闘う革命的左翼の共同の任務として安保ー日「韓」ー改憲闘争の高揚をかちとり、プロ独派の大前進を！

東京集会

東京では、六・一五安保と闘う国際連帯集会が、実行委主催のもと勝ち取られた。

はじめに、八〇年五月の南朝鮮光州蜂起を撮影した「光州は告発する」が上映され、続いて、司会から、エルサルバドル・ニカラグア・グァテマラを四ヵ月にわたって訪問してきたN氏が紹介され、さらに、沖縄人民の日帝の沖縄再支配を打ち破り沖縄解放闘争を闘い抜くアピールが紹介された。

そして、本集会の基調提起が主催者を代表して日朝共闘より行なわれた。その後、連帯アピールを受けていった。

フランスからは、民族排外主義・一国主義と闘い国際主義を実践する内容がアピールされ、アメリカの仲間からは、米階級闘争の高揚、反帝国際連帯闘争の意義について明らかにされた。在日朝鮮人の仲間からのアピールは、日朝人民の階級的連帯・共同闘争の内実・入管闘争について提起された。

次にLA実行委の太田氏から中米の闘いの現況のレポートを受けた。そして緊急アピールとして澤田氏からパレスチナ人民と連帯しイスラエルのレバノン侵攻を弾劾する提起がなされた。連帯アピールの最後に、山谷労働者から権力の組織破壊弾圧をはねのけ全国寄せ場の統合ー日雇全協結成へ闘っていることが報告された。

そして決意表明が、刑法ー赤堀闘争を闘う仲間、狭山ー部落解放を闘っている学生、最後に、朝鮮ーラテンアメリカ人民との連帯をかけて闘っている反帝国際連帯委からそれぞれなされた。

関西集会

六月一五日、関西では大阪府教育会館において実行委主催の「反戦反核・安保粉砕・国際連帯集会」が勝ち取られた。

最初に、ファラブントマルチ民族解放戦線（FMLN）を結成しキューバ・ニカラグア革命の勝利に続くエルサルバドル人民の闘いを撮影した「エルサルバドルー革命か死か」が上映された。

続いて京大ラテンアメリカ研究会の仲間が特別報告に立ち、この間のラテンアメリカ連帯闘争の報告と、日帝本国の我々が世界の闘う人民と連帯し、国際主義を実践する唯一の闘いこそ安保を粉砕することであるということについて力強い発言が行われた。

実行委を代表して反帝国際連帯委が基調報告を行い「核と戦争の根因、日本帝国主義打倒、日米安保粉砕の旗印を鮮明に勝ち取らなければならない」という本集会の意義が参加者全体の熱気に満ちた拍手で確認された。

そして、闘う沖縄人民の連帯アピール、講演に移っていった。

講師の桑原重夫氏（一一・二三救援会事務局長）からは「アジア情勢から反核運動の現状を斬る」というテーマで、光州蜂起以降前進する南朝鮮階級闘争やラテンアメリカの闘いを踏まえ、高揚する反戦反核運動の現状に対し、政府レベルの国連軍縮要求運動へ収斂させるのではなく、全世界の人民の核と戦争に対する真の怒りを団結させなければならない事が明らかにされた。

本集会成果を反戦反核闘争へ！

6・12 第八回意見交換会粉砕闘争闘われる
7・24刑法ー31監獄法闘争へ！

六月一二日、第八回「意見交換会」粉砕闘争が「病者」「障害者」を先頭として二五〇名の結集をもって闘い抜かれた。

日比谷小公園に結集した「意見交換会」粉砕実行委の部隊は、会場の日弁連会館を防衛する日帝国家権力ー機動隊と対時しつつ、集会を勝ち取っていった。そして、霞ヶ関での昼情宣を圧倒的に貫徹し、午後からは、清水谷公園で集会、デモ行進として、糾弾の嵐を法務省・日弁連に対し叩きつけていった。

集会は、赤堀中闘委、全障連、全国「精神病」者集団をはじめとして、監獄法改悪を許さない全国連絡会議、三里塚野戦病院、日雇全協・山谷争議団などから発言を受けていった。赤堀中闘委は、刑法改「正」ー保安処分新設攻撃の一層の激化の中で、赤堀氏への抗告棄却が、高裁小松の転任から鬼塚の新任をもって打ちおろされようとしていることを暴露し、糾弾していった。

また、関東赤堀さんと共に闘う会をはじめとする各地闘う会、学生戦線からは刑法戦線を闘う明学大、横市大など、そして刑行委の決意表明を受け、怒りの集会を貫徹したのである。

7・24刑法ー31監獄法闘争へ決起せよ！

日帝・法務省は、ファシズム統治機構確立の突破口として、その全体重をかけて、刑法改「正」ー保安処分新設攻撃の新たな、具体的な攻撃を開始した。すなわち、次期通常国会（一二月）上程をめざして、準備作業が最終的段階に突入していることである。去る六月二四日、法務省と厚生省は、保安処分に関するはじめての関係局長連絡会議を開き、収容施設や医師らの確保について協議を開始したのである。まさしく、両省間において、保安処分の実施を前提とした最後的煮つめの作業をはじめたということである。

保安処分新設に対応した精神衛生法改「正」をも目論む法務省、厚生省の連絡会議の設置は、「治療処分を考える会」の発足（五・二四）、「意見交換会」の継続と軌を一にして、突き進んでいることを明らかにしておかなければならない。そして刑法全面改「正」の突破口をなすものこそ四月二七日に国会上程された刑事施設法と留置施設法の二法に他ならない。

監獄法は、獄外に対しては武器の使用を許された武装ファシスト看守で監獄をファシズムの要塞としてうち固め、内に対しては「強制医療」の名の下に「障害者」、革命家の抹殺を狙うものとしてあり、絶対にこれを許すことはできない。刑法ー監獄法闘争の同時一体的推進こそ、刑法決戦勝利への道である。

七・二四「意見交換会」（第九回）粉砕闘争に起て！「要綱案」「意見書」、野田報告書弾劾の闘いを継承し、発展させ、七・二四に爆発せしめなければならない。

七・三一監獄法粉砕の全国集会に決起し、刑法決戦勝利の陣形を打ち固めよ！

6・20 監獄二法粉砕へ
関西で総決起闘争

去る六月二〇日、大阪・扇町公園において、監獄法改悪・警察留置施設法粉砕緊急行動委による全関西総決起集会が、「障害者」を先頭に刑法・監獄法と闘う労働者学生など三百名の結集で圧倒的に開催された。

集会は、主催者である緊急行動委を代表して関西救援連絡センターの挨拶で始まり、神戸市民救援会の加瀬部貴子氏、十一・二二救援会事務局長・桑原重夫氏らの発言、三里塚反対同盟、動労千葉のメッセージが続いた。更に特別アピールが共同訴訟人の会、鈴木君虐殺糾弾実行委、監獄法改悪を許さない全国連絡会議、部落解放同盟大阪府連荒本支部などから行われ、全国「精神病」者集団、大阪赤堀さんと共に闘う会、精神科医・共闘など二〇団体の行動委参加団体から決意表明が行われた。

発言に立った大阪・狭山ー赤堀共闘の同志は、①監獄二法上程攻撃が刑法改「正」ー保安処分を要とする≪ファシズムと戦争≫へ向けた攻撃であること、②南朝鮮人民の闘い、就中、獄中闘争との連帯を鮮明にして闘うこと、③赤堀・鈴木闘争と結合して政策阻止レベルを乗りこえた闘いを構築すべきこと、④安保ー改憲攻撃との対決を総路線に自国帝国主義打倒へ階級深部と共に闘うことを簡潔に訴えた。

集会終了後、大阪府警の弾圧を打ち破り、大阪駅前へ向けたデモンストレーションが勝ちとられ、〝監獄法改「正」粉砕〟〝警察留置法粉砕〟〝刑法改「正」ー保安処分粉砕〟のシュプレヒコールがこだました。

監獄二法粉砕へ全力で総決起しよう！

8・9 狭山闘争に決起せよ！

七七年八・九狭山上告棄却から五ヶ年を迎えんとしている我々は八・九棄却五ヶ年糾弾闘争の爆発を勝ち取り、新証拠ー小名木証言を武器に再審貫徹・石川氏実力奪還へ攻め登らなければならない。

七七年八・九棄却こそ、狭山闘争が無実の部落青年石川一雄氏を先頭に戦闘的部落大衆と革命的左翼の階級的共同闘争として日帝権力との非和解的対決へと登りつめたことに対する、日帝・最高裁の側からの回答＝狭山ー部落解放闘争の解体を狙った差別に充ち充ちた棄却決定だった。それ故、我々は、この八・九棄却五ヶ年糾弾闘争を日帝・最高裁による特別抗告棄却策動＝狭山闘争圧殺攻撃を打ち破り、階級的部落解放闘争創出の基軸的推進軸としてある狭山闘争の勝利を断乎勝ち取るものとして闘いぬかねばならないのだ。

今日、日帝による部落差別攻撃は、ファシズムと融和主義の攻撃として部落解放闘争に襲いかかっている。日帝は、狭山闘争を頂点とする差別糾弾闘争に対しては徹底した弾圧ー破壊攻撃で臨み、一方では、特措法ー地対法をもってする一大融和攻撃をもって部落解放闘争の体制内化ー窮貧化を策らんとしているのだ。部落解放闘争の今日的危機が、行政依存型体制内改良運動へ部落解放闘争をねじ曲げファシズムと融和への屈服を導かんとする特措法路線にあることを直視し、我々は特措法路線粉砕を真向から掲げ階級的部落解放闘争を創出しなければならない。特措法路線こそ、部落解放闘争の体制内化を産み出し、部落内ブルジョワジーのヘゲモニーを強化し、狭山闘争をはじめとした差別糾弾闘争を後景化させるものとして、ひいては天皇主義ファシズムへの全面的屈服を準備するものとしてあるのだ。

それ故、階級的部落解放闘争を創出する第一の課題は、部落差別の元凶としてある象徴天皇を「貴・賤」意識を産み出す皇国史観と共に打倒する闘いであり、第二の課題は、差別糾弾闘争の革命的復権を勝ち取ることであり、第三に部落内労働運動の創出を部落民プロレタリアートのヘゲモニー獲得を賭けて勝ち取ることであり、総じて、象徴天皇と日帝を打倒する階級的部落解放闘争を、部落大衆の階級深部の怒りの真只中から創出することなのである。

今日、狭山闘争は最高裁への特別抗告審段階にあって、新証拠ー小名木証言の補充意見書が提出され、再審か棄却かをめぐる決定的局面を迎えている。我々は、狭山闘争を、無実の石川氏を先頭に日帝権力への非和解的糾弾闘争として闘いぬき、文字通り部落解放闘争の基軸的推進軸として、いかなる権力の圧殺策動にもひるむことなく、その勝利をもぎ取らねばならない。

狭山後景化を打ち砕き、狭山闘争を階級的共同闘争として打ち鍛え、ファシズムと融和主義を打ち破り、特措法路線を粉砕する階級的部落解放闘争を、狭山闘争を基軸に創出せよ！

八・九上告棄却五ヶ年糾弾へ総決起し再審貫徹・石川氏実力奪還を戦取せよ！

7・5日「韓」外相会談粉砕闘争に決起！
安保ー日「韓」闘争の戦列を強化せよ

「韓国」外相李範錫の来日による日「韓」外相会談の開催（七月五日）ー首相鈴木への「表敬訪問」は、今秋再度の外相会談ー首脳会談を展望しつつ、日帝の「韓国」新植民地全面支配の野望を全プロレタリアート人民の前に、日帝が公然と叩き突けた挑戦状にほかならない。我々は、満腔の怒りをもってこれを弾劾し、日帝ー全斗煥体制打倒！米日「韓」反革命軍事同盟粉砕！のスローガンをもって安保ー日「韓」闘争の一大戦列を更に強化しなければならない。

早朝より外務省抗議行動に敢然と決起！

外相会談当日の五日、早朝より緊急抗議行動に決起した日朝共闘をはじめとする部隊は、警察権力ー機動隊の包囲網を突破し、外務省正門ー北門において怒りのシュプレヒコールを叩き突けた。〝日「韓」外相会談粉砕！〟〝南朝鮮人民と連帯して闘うぞ！〟のコールが外務省周辺にこだまする中、外務省守衛は我々の突きつける「抗議文」を受け取らざるを得ず、終始密集した我々の抗議行動に混乱を呈した機動隊が部隊で我々を「実力排除」するまで一時間の抗議行動が貫徹された。更に、日比屋公園に封じ込めんとする権力の阻止線を突破、情宣を貫徹した。

「韓国」新植民地経済の破綻と日帝の新植民地全面支配

いわゆる「手形詐欺事件」に対する南朝鮮人民の怒りを主要関係者の更迭と関係者二八人の起訴をもって封じ込めんとする全斗煥は、六月二日、前外相盧信永を国家安全企画部（旧KCIA）部長に、前大統領秘書室長李範錫を外相に任命した。新外相李は、「韓国外交の基軸となる米韓関係調整」を目的に渡米、帰「韓」の過程で当初公表されていなかった来日を実現させたのである。去る四月の外務審議官柳谷の訪「韓」ー六月駐「韓」大使前田による〝六〇億ドル円借款〟への日帝回答以降、「膠着状態」といわれた「経済援助問題」に対する今回の外相会談が意味するものこそ、「韓国」新植民地経済の全面破綻と日帝の「韓国」新植民地全面支配に他ならない。

即ち第四次五ヶ年計画の完全破綻にみられるごとく、「韓国」経済は、日帝の「韓国」新植民地支配体制の下部構造をなす外資依存輸出主導型経済の構造的破綻という状況にあり、国際収支危機↓外債危機↓設備投資減退↓農業危機という全面破局を迎えているのである。瀕死の「韓国」経済を建て直すため、全斗煥は「防衛借款」を建前に日帝に六〇億ドルを要願したのだ。日帝はこの「韓国」の最弱の環に付け入り、「韓国」新植民地の完全支配を果さんとしているのである。

光州蜂起を継承し闘う南朝鮮階級闘争に日帝打倒で応えよ！

米帝・レーガンの沖縄・「韓国」への公然たる戦域核配備宣言と軌を一に、独自の核武装を狙う日帝は、侵略反革命の刃を剝き出しに攻撃を激化している。安保の〝核安保〟への再編の中、全斗換は、五月、鈴木首相フレイザーとの会談でいわゆる〝太平洋サミット〟を提唱し、輸出拡大を各国に要請するとともに、米日「韓」反革命軍事同盟の強化に躍起となっている。

南朝鮮労働者を恐るべき低賃金で搾取し、同時に、核戦争の犠牲をも強制する帝国主義と軍部反革命政権に南朝鮮プロレタリアートが民族的階級的怒りをもって決起するのは当然なのである。そしてだからこそ、あの八〇年光州蜂起に示される全斗換打倒の非和解的な階級闘争を世界史的な闘いとして爆発させるのだ。

見よ！ 南朝鮮人民は、光州蜂起の意義を一歩も後退させることなく闘い続けているではないか！三・一八米文化センター焼き打ちそして、光州蜂起二周年を期した各大学での反政府ビラまき、官製集会と真向から対決して勝ち取られた「光州追悼礼拝」の一、〇〇〇余名のデモー坐りこみ、その後のソウル大・東国大におけるデモ等南朝鮮人民の反帝ー武装解放闘争に連帯する道こそ、日朝連動する革命に向けた日帝ー全斗煥体制打倒の闘いに総決起する以外にないのだ！

7・7華青闘告発に実践的に応え、プロ国際主義で武装せよ

八一年一・二三金大中氏等「減刑」以降、日本プロレタリアート人民の日朝連帯闘争は、混迷と停退の淵を彷徨している。抑圧民族プロレタリアートである我々は、この現状を打破する階級的任務を過渡期世界のプロレタリア国際主義の実践として貫徹しなければならない。

周知の通り「七・七」とは、一九三七年、戦前天皇制権力の前に日本共産党をはじめとする日本プロレタリアート人民が主体的屈服に陥る中、日帝が中国全面侵略を開始した「蘆溝橋事件」のその日であり、そして、七〇年、華僑青年闘争委員会が日本プロレタリアート総体に、就中、革命的左翼に「七・七告発」を行ったその日である。ー「闘う部分といわれた日本の新左翼のなかにも、明確に排外主義に抗するというイデオロギーが構築されていない。……勝手気ままに連帯を言っても、我々は信用できない。日本階級闘争のなかに、ついに被抑圧民族の問題は定着しなかったのだ。」

かかる「七・七華青闘告発」に実践的に応える水路こそ、レーニンのコミンテルン二回大会における『民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案』ー「一国のプロレタリア的闘争の利益を世界的な規模のプロレタリア的闘争の利益に従属させること……ブルジョアジーにたいする勝利を実現しつつある民族にたいしては、国際資本を打倒するために最大の民族的犠牲をも甘受する」を基礎に打ち建てられた過渡期世界のプロレタリア国際主義を先進国プロレタリアートである我々が実践し、三ブロックテーゼで武装して、自国帝国主義打倒ー世界革命戦争を切り拓くことなのである。

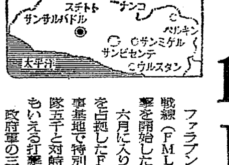
国家保安法ー社会安全法体制粉砕！入管体制粉砕！

「韓国全政治犯」釈放の闘いが実践的に問われている。全斗換による日常的な獄死ー虐殺・転向攻撃を断じて許してはならない。就中、徐俊植氏への五・二七社会安全法保安監護処分更新を満腔の怒りをもって弾劾し、一二月金元重氏への適用、来年二月姜鐘健氏への更新を日帝ー全斗煥体制打倒の闘いと結合して断乎阻止せよ！（徐俊植氏は保安監護処分更新に対して行政訴訟を提訴している）

入管体制打倒の実践を積み重ね、在日朝鮮人民との階級的連帯を戦取せよ！

安保ー日「韓」闘争の隊列を強化し、日帝の朝鮮侵略反革命を粉砕せよ！

FMLN首都攻勢に呼応し
7・18 L・A連帯集会へ！



ファラブント・マルチ民族解放戦線（FMLN）が、再び首都攻撃を開始した。

六月に入り、東部の町ペルキンを占拠したFMLNは、米国内軍事基地で特別訓練を受けた精鋭部隊五千と対峙し、これに決定的ともいえる打撃を与えた。

政府軍の三分の一にあたる五千の部隊を撃破したFMLNはさらに東部のサンビセンテ・ウスルタン・サンミゲル・北部のチャランテナンゴ、そして首都のサンサルバドルにおいても、放送局の占拠を含めた強力な作戦を展開し、政府軍副司令官フランシスコ・アドルフオ・カステイロを捕捉するまでにいたっている。

FMLNの、この攻撃こそ、軍部独裁政権が勝利したとうそぶく三月総選挙の欺瞞性を白日の下にさらけ出すと共に、エルサルバドル革命の勝利が、総蜂起にむけてのぼりつめていることの証左でもある。

だからこそ、米帝は、新植民地支配の崩壊的危機を中南米において、なんとしてもくいとめんと、反革命特殊ゲリラ部隊グリーン・ベレーの大量投入、軍部独裁政権に対する強力なテコ入れを行い、革命の圧殺に躍起となっているのである。

米・日・パナマ三国による「第二パナマ運河構想」の具体化にともなって、日帝の中南米新植民地支配確立の野望も激しさをまし、中南米の反革命軍部独裁政権に対する経済援助＝中南米革命に対する敵対者として、その姿をさらけだすにいたっている。

昨年の七月、L・A連帯実行委は、FMLN・FDRの代表ファナ同志を招いて、ラテンアメリカ人民との国際連帯の第一歩を具体的にふみ出した。

そして、サンディニスタ民族解放戦線に領導され勝利した七・一九ニカラグア革命三周年にあたって、L・A人民との連帯を更に深めるべく集会が開催される！

7.18
ニカラグア革命三周年
L・A人民連帯集会
午後一時／全水道会館
主催　L・A連帯実

米帝ーイスラエルのレバノン侵略反革命戦争粉砕！
パレスチナ武装解放闘争への反革命攻撃粉砕！

六月四日から始まった、レバノンのパレスチナ・ゲリラ拠点に対するイスラエル軍の砲、爆撃は、六日、米帝の最新鋭兵器をもってする陸海空二万の大部隊によるレバノンへの全面的なパレスチナ人民虐殺のための侵略反革命戦争へと発展した。

そして九日には、レバノンのベカー高原にあるシリア軍ミサイル基地に対しても、イスラエルは、大規模な空爆と戦車部隊による攻撃を行い、「これは四日間にわたるレバノンでのゲリラ掃討作戦の転換点である」（イスラエル国防相シャロン）と、文字通り、七三年第四次中東戦争以来の全面戦争への突入を示唆するに至っている。

一〇日、イスラエルは「ベイルート制圧」の方針を打ち出し、他方で一一日、シリアとの停戦を発表したが、「PLOを停戦の相手に含まない」（シャロン）と述べPLO（パレスチナ解放機構）の解体・パレスチナ解放闘争の壊滅をあらためて宣言したのである。

米帝は、イスラエルの方針を「調停」「和平交渉」をもって貫徹すべく、米大統領特使ハビブをおくりこみ、ソ連のパレスチナ革命への敵対を招来せしめつつ、イスラエルを先兵とした中東全面支配を目論んでいるのだ。

即ちそれは、二七日、PLOの武装解除・レバノンからの撤退を柱とする方針をイスラエル政府が閣議決定したものを、PLOに承認させようとするものであり、キリスト教右派・ファランジスト党をレバノン政府の政権担当者にさせ、帝国主義とシオニズムとアラブ反動派による中東支配を打ち立てんとするものなのである。

我々は、死を賭して米帝・イスラエルと闘い続けるパレスチナ人民と固く連帯して、世界革命戦争の大道を切り拓いていくことを熱烈に宣言するものである。

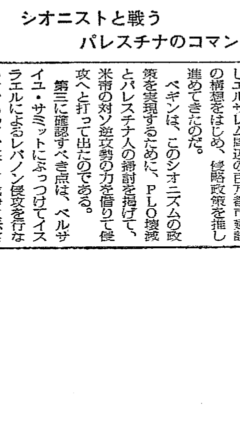
我々は、イスラエル軍のレバノン侵攻の持つ第一の、最も核心的な性格を、米帝・レーガンの対ソ逆攻勢の重要な一環を中東において実現せんとしたものであることとして、はっきりと把えておかなくてはならない。

つまり、PLOを壊滅させ、そして中東での反米的位置をもつシリアを、イスラエルを先兵とし叩くことによって、中東支配の崩壊的危機の巻き返しを狙った米帝の戦争政策であるということである。

そして第二に確認すべき点は、シオニスト・イスラエルのパレスチナ（人民）絶滅政策の為の侵略反革命戦争である、ということである。

そもそも、七七年六月、イスラエル首相となったベギンは入植地拡大政策を推進し、七八年九月の「キャンプ・デービット合意」に基づいて調印されたイスラエル・エジプト平和条約（七九年三月）をテコにヨルダン川西岸での新入植地建設のための土地接収に着手しエルサレム周辺の百万都市建設の構想をはじめ、侵略政策を推し進めてきたのだ。

ベギンは、このシオニズムの政策を実現するために、PLO壊滅とパレスチナ人の掃討を掲げて、米帝の対ソ逆攻勢の力を借りて侵攻へと打って出たのである。



シオニストと戦う
パレスチナのコマンド

第三に確認すべき点は、ベルサイユ・サミットにぶっつけてイスラエルによるレバノン侵攻を行なわせ、もって、英・ア戦争に示された没落帝国主義と新興ブルジョア民族国家の矛盾を対ソ逆攻勢の一点で統一し、更に、益々深まる帝間経済対立をも対ソ逆攻勢の下で「調整」し、安保ーNATOを強化させるという米帝の狙いがあったということである。

我々は、米帝・イスラエルによるPLO壊滅を目的とするレバノン侵攻、パレスチナ人民虐殺の侵略反革命戦争を怒りを込めて弾劾し、闘うパレスチナ人民の武装解放闘争と固く連帯して、日帝打倒・安保粉砕の勝利を切り拓かねばならない。

7・4 三里塚闘争が大爆発！

日帝の激化する二期着工攻撃の真只中、一九六六年七月四日の三里塚空港設置閣議決定から一六年目、七・四三里塚現地闘争が、三里塚第一公園に全国から一万名の結集で大爆発した。

本集会に先立ち、我が共産主義者同盟蜂起派を最先頭に、戦旗派、全国委員会、三闘連東京神奈川連の結集でもって、プロ独派の政治闘争として断乎前段集会を打ち抜いた。反対同盟からは、小川源氏、長谷川たけ氏、他川英祐氏の熱い連帯アピールがなされた。

正午過ぎに始まった本集会では北原事務局長より、三里塚闘争一七年の闘いの地平を発展させ、一団の同盟分断・懐柔策を打ち砕き非妥協・実力闘争でもって、二期攻撃を粉砕し、空港廃港へ突き進もうと基調が提起された。

そして全国から、三里塚闘争に連帯する仲間のアピールが、動労千葉、部落解放同盟、全障連、北富士忍草母の会、関西新空港に反対する住民、全金本山等次々となされた。

次に、三里塚闘争一六年の中で敵国家権力と真向から闘い抜き、不当な弾圧ー裁判闘争の中、反革命判決を受け、下獄する仲間から三里塚闘争の勝利を最後まで闘い抜くという決意表明がなされた。

一七年間不屈に闘い益々闘いの闘志を燃やす反対同盟からは、島村良助氏、堀川英祐氏、鈴木幸司氏等のアピールがなされ、最後に集会宣言が「反対同盟は、政府・公団のいかなる攻撃も粉砕し、『農地死守・実力闘争』をつらぬき、勝利まで闘いぬく」と高々に宣言された。集会スローガンの採択後、圧倒的デモンストレーションが岩山まで貫徹された。

プロ独派の旗幟鮮明に空港粉砕へ決起！（7月4日／於岩山）

一〇・一一三里塚 一〇・二一国際反戦デー闘争へ進撃せよ！

我々は、不屈に闘う三里塚農民と断乎として結合し、労農同盟を更に強化し、三里塚一七年の革命的地平を継承し三里塚侵略反革命軍事空港粉砕・二期実力阻止の闘いに勝利していかなければならない。

「話し合い」攻撃、「成田用水」、「三里塚芝山地域対策会議」ー条件派組織構想等、次々と打ち下ろされる日帝の攻撃は、三期への布石としてあり、断乎粉砕していかなければならない。日帝は同盟の分断・懐柔・破壊の一方で東山氏虐殺をめぐる付審判請求、成田治安立法取消請求をことごとく却下してきているのだ。

三里塚闘争ー反対同盟にかけられた二期攻撃の重圧は、日帝の侵略反革命総路線ー≪ファシズムと戦争≫へ向けた重圧である。

日帝のファシズム総路線との全面対決をもって、日帝打倒・安保粉砕を勝ちとらなければならない。

全世界で、先進国、後進国、「労働者国家」ー三ブロックの階級闘争の未曾有の爆発が現実のものとなっている。

自国帝国主義打倒ー国際主義を鮮明にし、社共人民戦線派と分岐し、今夏闘争の爆発をもって、一〇・一一三里塚闘争から一〇・二一国際反戦デーへ怒濤の進撃を開始せよ！

（一面より続く）

万人、陸軍慰安婦数万人が連行された。」（前同）

日本国内で約三〇万人の朝鮮人労働者の死傷者をだし（このうち死亡者は約六万人）、軍人・軍属の死亡、行方不明が約一五万人にのぼる。また広島・長崎の被爆犠牲者は数万人に達するといわれている。

強制連行された朝鮮人と中国人の多くがタコ部屋制度の下で虐待され差別され死亡したのである。

「タコ部屋制度の本質はなんら変らないまま日中戦争を迎え、タコは『国家総動員法』による国家統制をうけ、強制連行された中国人・朝鮮人は、『強制収容所』張りのタコ部屋に入れられることになったのである。」（『常紋』一八五頁）

「職業紹介の国営化は…タコ部屋制度の一層の凶悪化につながった。すなわち『募集部屋』（日本人）、『半島部屋』（朝鮮人）、『華人部屋』（中国人）など、強制収容所的性格をあらわにする契機となった。」（同一九二頁）

我々は、船本洲治同志と共にキッパリとこう宣言する。

「日帝が実現せんとした〝大東亜共栄圏〟を我々は次のように読みかえることが出来る。すなわちそれは、日帝本国への富と底辺労働の集中のための〝手配師体制〟である、と。」（船本論文集）

以上で、日本資本主義が、どのように階級的底辺の勤労人民を虐待かつ差別し搾取しながら流動的下層労働者を形成していったのかまた、日帝ファシズムが、どのように帝国主義本国と被抑圧民族の階級深部を差別し酷使し虐殺したかが具体的に判ったであろう。

結語

我々は、流動的下層労働者の形成過程を、集治監囚人労働・拘禁タコ部屋労働・朝鮮人強制連行労働の系譜において把えた。勿論、この三つの形態の労働の間に人的血統があるわけではない。だが、階級的底辺に最下層の労働者を組み敷いて虐待し酷使かつ搾取し続けた日本資本主義の支配体系それ自身は継承され、この歴史的な支配体系の下で流動的下層労働者は形成されたのである。従って、我々は、以上の歴史的事実に基づく特殊日本的な形成過程と戦後現代帝国主義の差別的な支配搾取系列との統一において、今日の流動的下層労働者の構造的位置と階級的性格を確定するのである。それ故これを産業資本主義段階の停滞的過剰人口と同一視するが如き低水準には留まり得ないのである。

四大寄せ場こそ、階級深部の怒りの坩堝（るつぼ）であり、プロレタリア国際主義の坩堝である。

「高田馬場の「日雇寄せ場」に隣接して、山手線をはさみ、朝鮮人密集居住区がある。国鉄所有地を『不法占拠』している朝鮮人スラム街である。日雇労働者の寄せ場と被差別諸階層居住区との因縁は深い。山谷に隣接する浅草一帯は被差別部落であり、日暮里・本木町一帯は朝鮮人居住区であり、吉原トルコ街は昔の遊郭吉原である。釜ケ崎には生野・浪速に朝鮮人居住区があり、大正区北恩加には沖縄人居住区、また西成部落、飛田売春街が隣接している。

日雇寄せ場と朝鮮人居住区の関係をとり出してみても、その根は深く日本帝国主義の歴史的存立基盤に喰い込んでいる。

朝鮮人密集居住区は、皇軍を手配師強盗集団とする朝鮮人強制連行の歴史的事実を無視しては存在し得ない」（船本論文）

「流動的下層労働者密集居住区＝釜ヶ崎、山谷こそ、階級矛盾のもっとも激化している場所であり日本帝国主義の労働者・人民に対する分断・支配統治様式の秘密が赤裸々に暴露される場所であり、革命か反革命かの問題として常に鋭く突きつけられているこの地区の闘争こそ…一切の左翼思想・組織が、本物かニセ物かを常にバクロされる修羅場なのだ！」

流動的下層労働者の闘いを階級的労働運動の出撃拠点にせよ！

●訂正とお詫び
前号一面最上段、「英国から」↓「スペインから」／「同国の」↓「英国の」に訂正します。